



特集 時代が彼にあこがれる

## 知の巨人 南方熊楠

熊野古道中辺路の名所、継桜王子と一方杉。杉の巨木が9本残る。かつては森とともに40本の巨木があり、熊楠はこの森の保存にも奔走し、その結果、皆伐は免れた。



田辺湾に浮かぶ神島(国指定天然記念物)は熊楠が守った島、昭和天皇と接見した行幸の島だ。熊楠はこの島を、将来、周辺の陸地の森が消えた時、本来の森はこうだったという「ものさし」として残そうとした。



那智四十八滝の一つ、陰陽の滝。付近にあるクラガリ谷に、熊楠は植物採集によく通ったという。



# 世界が認める、熊楠の森へ。

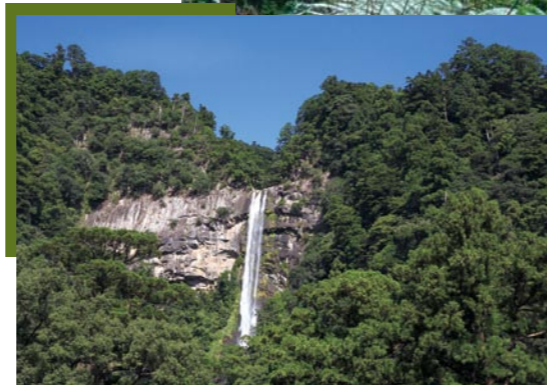
Kumagusu's forest

「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されるずっと前に、神域の森や熊野古道の環境、人々の営みの中に、価値を見いだした熊楠がいた。彼が守った日本人の誇りに通じる宝物。それは、世界遺産の根幹「文化的景観」となって受け継がれている。

## もっとうんと前からエコロジストだった。

昨今、熊楠は「エコロジ―活動の先駆け」と評価されている。それは彼が日本に初めて「エコロジ―」という言葉を紹介したからではない。あらゆる生命のつながりを見つめ、その共生を説き、神社祭祀による森林伐採に反対した運動家を研究する学問として使っている。南方熊楠顕彰館の中瀬喜陽館長(77)

熊楠が森林伐採に反対したのは、単純に研究する森が荒らされることへの怒りだった。しかしその研究は、千古不伐の「神林」にみるような、日本人が長く大切にしてきたもの。熊楠は、その存在こそ、人間と自然の関係を調和させていると説いたのです」と語る。熊楠の思考した、あらゆる生命がつながる曼陀羅のような宇宙観に、現在の「エコロジ―」という言葉は適当ではないかもしれない。しかし様々な環境問題に直面している今、熊楠が発信した言葉や一挙動に、今後私たちが自然環境とどう向き合うべきか、指針が見つかるに違いない。熊楠が追求した本来の「エコロジ―」の視点に、学ぶことはまだまだある。



熊野の自然信仰のシンボル、那智の滝と那智原始林。110年前はさらに森は深く、熊楠は当初2、3ヶ月の調査予定を、結果3年かけ、熊野にのめり込むきっかけになった。

常緑樹に混じって天然杉など巨木が林立する那智原始林。60種を超える樹木、地表を覆うシダや苔、カスラのツル絡みつく森は、温暖多雨に育まれた多様性の宝庫。果てしない時をかけて生まれた“神の森”だ。

## 世界を知る熊楠を虜にした熊野の森、神秘の森とは。

110年前、海外遊学で最先端の学問にひたって帰国した熊楠を驚かせた熊野の森。それはどんな森だったのか。熊野の森の保全や再生に取り組む和歌山県自然環境研究会会長の玉井清夫さん(71)に話を聞いた。紀伊半島南部の熊野は千歳前後の低山が密集した山岳地帯で、屋久島に次ぐ多雨地帯。森は照葉樹林といわれ、常緑葉樹を主に針葉樹も落葉樹も混然一体となっている。「複雑な地形で、年中、雲霧がこもる地も太陽降り注ぐ地もある。安定した森林気候は様々な生きものを受け入れ、その数は想像を超えるほど。生命力ある森があつてこそ、自然信仰の聖地、熊野はある」と玉井さん。今、熊楠の森は当時の姿を留めてはいない。しかし、その意志を継ぐ人々の力で「神林」は断片的にだが残る。「熊野の森は生きものたちの重厚なつながりで成り立っている。熊楠の視点は生命のつながりの大切さを教えてくれる」。人も生きもの。生命の息づかいを感じるアンテナを開くことで、熊楠を虜にした神秘の森に近い。



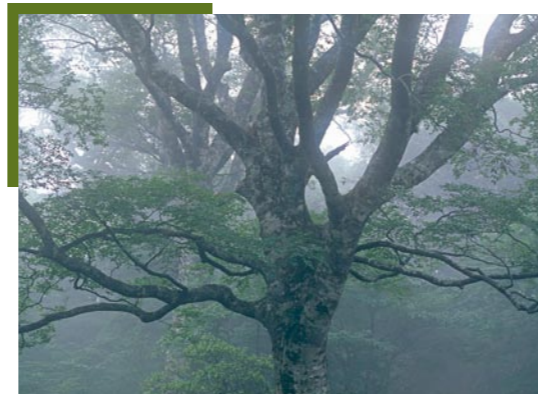
粘菌「ウツボホコリ」。粘菌は変形菌とも呼ばれ、時間とともに形や色が変わっていく。(日本変形菌研究会提供)



暗闇で幻想的に光るキノコ、シイトモンビタケ。黒潮の影響を受けて発達した、スダジイの古木のある深い海岸林でみられる。



熊野の固有種、キジョウウロウホトギス。湿り気の多い崖地などで秋に見られる。他にもこの地域で見発見された動植物は数多い。



紀南地方の最高峰、大塔山(1,122m)に本州最南端、日本の南限のブナ林がある。

写真/楠本弘児